

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 20 日現在

機関番号：16401

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23320138

研究課題名(和文) 西日本における中世石造物の成立と地域的展開 - 石材と形態・様式に着目して -

研究課題名(英文) Formation and local development of medieval stonework in western part of Japan ; Research which paid its attention to the stone and the form

研究代表者

市村 高男 (ICHIMURA, TAKAO)

高知大学・教育研究部総合科学系・教授

研究者番号：80294817

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 14,600,000円、(間接経費) 4,380,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、中世石造物の成立と地域的展開について、石質と形態の両面から検討し、13世紀後半に畿内系石造物が成立し、地方伝播が始まること、各地域側は、それぞれの地域で産出する石材を使用し、地域性にあった形態を造り上げた結果、地域ごとに多様な石材・様式の石造物が出現したことを明らかにした。

また、西日本の周辺部には、畿内系石造物の影響を受けない個性的事例が多いことに着目し、その成立事情を大陸・半島の石造文化との関連から捉えようと調査を実施し、九州西海岸を中心に薩摩塔など中国産石造物を多数確認、日本海沿岸地域では韓国石造文化と関連する石造物を検出し、両国を見据えた調査の必要性を指摘した。

研究成果の概要(英文)：This research considered formation and local deployment of stonework from a stone and a style medieval times, and clarified the following items. 1.The Kinai type stonework is formed in the second half of the 13th century, and spread through rural areas. 2.The stone from local is used in each area, and since the stonework suitable for each area was built, various stonework appeared. 3.Different stonework from the Kinai type was built in Japanese various places except Kinai, and it can consider relation with the stonework culture of the China style spread before the 13th century. 4.The stonework of the China style is mainly distributed over West Coast, Kyushu, and the stonework of the South Korean style can be checked in the area facing the Sea of Japan. 5. The necessity for the investigation and research which put East Asia into the view is increasing.

研究分野：人文

科研費の分科・細目：史学・日本史

キーワード：石造物 石材識別 形態・様式 畿内系・在地系 地域的展開 中国・韓国 技術・文化交流

## 1. 研究開始当初の背景

(1)近年、畿内型石造物を中心に中世石造物研究が急速に発展を遂げた。しかし、そこには畿内型石造物が各地へ伝播することによって、中世石造物が成立・展開すると捉える傾向があり、九州等に存在する個性的な石造物は特殊・後進的なものと見なされることが多かった。畿内型石造物は、中国渡来の伊派石工らの制作活動に起点が求められ、13世紀後半に優美な形態が定着するが、その一方で、日本各地に伊派以前の石造も少なからず残存し、古代以来の石造技術・文化が、13世紀初頭に伝播した新たな技術・文化とどのように関わりつつ、日本中世の石造物が成立するのか、未解明の問題が山積みされている。

(2)近年、東大寺南大門石獅子が、中国浙江省産石材を使用し、寧波の石工集団によって造られたこと、その内の一人が伊派石工の先祖であることなどが解明され、中国浙江省の石造物や石材に対する関心が急速に高まり、日本に残る宋風石造物の調査研究が進展しつつある。また、滋賀県石塔寺の三層石塔の見直しを機に、これまで視野に入っていなかった韓半島の石造文化・技術と、日本のそれとの関係についても、関心が寄せられるようになった。これに伴って、これまでのように畿内型の代表的石造物ばかりを検討するのではなく、九州などに分布する個性的で異形の石造物についても、東アジアとの技術・文化交流を前提にして、検討していく必要があるとの共通認識を生み出した。

(3)こうした状況の中で、市村らは御影石製中世石造物の分布とその意味について、石材・石質と形態から検討した。そして、石造物の分布論など石材流通・移動を論ずる際には、石材の産地同定の確度を上げることが不可欠であること、御影石・日引石を石材とする畿内型石造物の広域流通品は、その分布に地域偏差があること、その偏差は在地系石造物の希薄な地域に大量に搬入されるのに対し、それ以外の地域には点的にしか搬入されないことなどを明らかにした。

これによって、在地系石造物が拡がる地域には、ブランド品である御影石製石造物も、それを駆逐して拡がることができなかつたことが判明し、中世石造物の地域的展開の全体像を明らかにするには、畿内型石造物の伝播とともに、それに対する各地の対応の中で在地系石造物の成立・展開についての調査・検討が不可欠となってきた。

## 2. 研究の目的

(1)本研究では、先のプロジェクトを継承・発展させ、最新の研究動向をくみ取り、石造物研究の視点と方法を刷新しつつ、新たな研究段階を目指して、以下のような目標を設定する。

畿内系中世石造物の成立と展開に関す

る議論を点検する。

在地系石造物成立の前提とそれに対する畿内型石造物の影響を検討する。

東アジア石造物が日本中世石造物の成立に与えた影響とそのあり方を検討する。  
- を踏まえ、西日本における中世石造物の成立と地域的展開について検討する。

(2) では伊派石工の手になる大和系石造物中心の議論に対し、古代の石造文化・技術の影響や近江系・山城系石造物の検討など包括的な検討を試み、畿内型と一括し得る中世石造物成立の全体像を示し、石材と形態の両面から「畿内的なもの」の指標を明確にする。この指標によって、畿内型石造物が各地の石造物に与えた影響について検証する。

では西日本各地の地元産石材を使った在地系石造物が、個性的な形態・様式を獲得した条件と背景を考察し、各地の石材加工事情と畿内系石工・技術の交渉の有無を解明する。在地系・畿内型石造物の混在地域では、畿内型石造物が搬入品か、移動する畿内系石工による制作例か、それとも畿内系技術を受容した在地系石工の制作か、石材と形態・様式の両面から検証し、中世石造物の地域的展開の実態と特質に迫る。

では石材の岩石学的分析により、中国・韓国からの搬入石造物であることを確認しつつ、その形態・様式の特徴を抽出し、これを指標としながら、九州を中心に広がる個性的な異形の石造物を、石材と形態・様式の両面から検討し、搬入品から国内石材による模造品へ、模造品から和風化した石造物へ、という定着過程や各地への伝播のあり方を考える。

では - の成果を総合し、一方に畿内型石造物の成立と各地への伝播という大きな流れを捉え、もう一方に中国・韓国の影響を受けて成立する九州の石造物の東への拡散を見据えながら、その間に介在する中四国地域が、それぞれの伝統と独自の論理によって、どのように中世石造物を成立させていくのか、三者の相互関係の中で考察し、西日本における中世石造物の成立と地域的展開の様相を提示する。

## 3. 研究の方法

(1)中世石造物の基本とされる畿内型石造物の形態・様式と意匠について調査・検討を深め、畿内型と一括される大和系・山城系・近江系の特徴を抽出し、メンバーの共通認識を形成する。そのため、畿内の調査を進めるメンバーは、主要な畿内型石造物の実測図作成・拓本採取を実施し、資料化を図りつつ、具体的な比較・検討を試みる。また、畿内型石造物成立について、主として石材と形態の両面から、古代以来の石造物と、12世紀末に

中国から伝播した新たな石造技術によって制作された事例との比較・検討を試み、畿内型石造物の成立の様相に迫る。

(2) 畿内型石造物に対し、各地に展開する多様な石造物を在地系石造物として捉え、西日本各地にどのような個性的・異形な石造物が存在するのか、実測図作成・拓本採取による資料化を図り、具体的に調査・検討を進める。その際、西日本全域の面的調査は難しいため、既存の成果を踏まえ、山陰、瀬戸内沿岸地域(とりわけ備讃・芸予)、北部九州、大分県、鹿児島県等の諸地域の石造物について重点的に調査・検討し、その特徴を把握する。その上で、石材と形態の両面から畿内型石造物の影響のあり方を考えていく。これらの課題については、各地のメンバーが主体的に調査・検討を進めるとともに、全体での検討会を通じて、その成果をメンバー全体で共有し、地域ごとの比較・検討に資するようとする。

(3) 石造物の分布や流通を問題とすれば、その石造物石材の産地が問題となる。それが分からなければ、石造物そのものの評価も不十分になる。とりわけ在地系石造物であれば、地元産石材を使用するのが普通であり、地元産以外の石材なら、他地域からの搬入品であったことになる。石造物石材の識別は、これまでは調査者の経験によりなされて来たが、石材の産地同定・識別は客観的で確度の高いものであることが要求される。そこで本研究では、これまでの目視による観察に加え、石材ごとの制作技術の相違による形態の微妙な差異、さらには岩石学研究者との協働による、ルーペを使用した含有鉱物の観察や、帯磁率の計測による客観的な数値の比較・検討などを重ね、その確度を高めるよう努める。

(4) 宋風石造物の存在が注目されているが、それを岩石学的に確認した研究はほとんどなく、それゆえ本研究では、岩石学の研究者とともに宋風石造物と石切場の調査を実施し、石材の厳密な識別・判断を行う。合わせて浙江石材の生産と加工のあり方についても調査し、日本で確認される宋風石造物との関連を考える。また、百済との関連が指摘される滋賀県石塔寺の三層石塔との検討を深めるため、韓国の石造石塔に重点を置いた調査が不可欠であり、韓国の公的調査で所在が確認されているものを可能な限り実見し、日本の中世層塔との比較検討を進める。

#### 4. 研究成果

(1) 確立した畿内型石造物は、硬質の花崗岩を石材にして、均整のとれたものがほとんどであり、各地に残る在地系のそれと比較すれば、その違いは一目瞭然である。それは、五輪塔・宝篋印塔・宝塔・層塔などに彫り込まれた梵字や仏像の彫り方、各部の装飾についても共通してみられる点である。

畿内型と括られる大和系・山城系・近江系については、基礎部の格狭間の意匠、基礎部上面の装飾の違い、笠の段数や隅飾り突起などに微妙な相違が確認されているが、相互に影響し合う点が多く、3系統の存在を意識しつつも細部に拘り過ぎず、全体として共通する形態・様式に注目し、各地の事例と比較することが必要であることを確認した。

(2) 畿内型石造物は、13世紀半ば頃に出現し、13世紀後期に確立するとされるが、近畿圏やその周辺でも13世紀半ば以前の石造物が少なからず確認される。当然ながら、これらの石造物は、畿内型石造物の起点とされる伊派系石工らが制作した石造物と系統を異にし、形態・意匠など様々な面で大きな相違があり、しかも使用している石材は凝灰岩がほとんどである。

これまでの研究では、伊派系石工の手になる優品に関心が集まり、伊派系石工以前の古式石造物については十分検討されてこなかったが、伊派系石工による石造物制作がスムーズに軌道に乗った背景には、こうした12世紀後期～13世紀半ばの古式石造物の展開があったことは間違いない。しかし、伊派系石工によって畿内型中世石造物が確立すると、これらの古式石造物は駆逐されていくため、その起源や伊派系以降の石造物にどのような影響を与えたのかはまだ未解明である。

本研究は、畿内に残存するこれらの古式石造物の調査が不十分なまま終了し、今後課題を残すことになったが、少なくともこれらの石造物が伊派系石造物の成立・定着以前に制作されていたのなら、その伝統技術の一部が畿内型中世石造物の成立に何らかの影響を与えた可能性があるはずである。その古式石造物の成立について考えてみると、畿内圏で自生したというより、13世紀前半以前に中国から伝播した石造技術をベースにしている可能性が高い。中世の畿内型石造物のすべてを伊派系石工の登場から考えず、それに先行するいくつかの石造文化伝播の波の中で捉え直す視点が不可欠になったといえる。

(3) それは畿内圏以外においても同様である。大分県臼杵市には、伊派系以前の石造物として、12世紀後半の一石彫製五輪塔や五輪塔の存在が知られていたが、本研究や近年の各地での調査の進展とともに、山陰など各地で12世紀後期-13世紀前半と見られる五輪塔の存在が明らかになってきた。とりわけ水輪が橐型をした古式五輪塔は各地で確認され、この時期の比較的広い範囲で制作されていた形式である可能性が高まった。これらの古式石造物は、伊派系の石造物が成立・展開する以前に、畿内のみならず東西日本で制作されていた可能性があり、伊派系の加工技術以前に伝播した中国石造物の影響のもとに成立したと考えられる。本研究では、橐型の水輪を持つ五輪塔や一石彫製五輪塔を網羅し

て検討するには到らなかったが、畿内系中世石造物に先行する石造物のあり方の一端を見通すことができた。

(4)それとともに注目されるのは、鹿児島県を中心に、伊派系畿内石造物の影響をほとんど受けない石造物群が分布する点である。これを遠隔地の後進的の石造物とする傾向があったが、南九州市川辺町清水磨崖仏群の中にある宝塔の特徴的な伏鉢が、中国の石造文化の影響による形態である可能性が指摘され、伊派系以前もしくはそれと別に伝播した石造文化との関連が考えられるようになった。

また、鹿児島県や大分県など、九州には層塔・宝塔・宝篋印塔の笠部に垂木を表現したものが多数存在し、この地域の特徴の一つであることが確認された。これは木造塔の形態を石造塔に写し替えたもので、時代が下るにつれて形骸化するが、こうした垂木の装飾を持つ石造物は、中国や半島の石塔でよく見られることから、その影響のもとに成立した可能性が高まった。これも伊派系畿内型石造物とは別の時期または別ルートで伝播した石造技術・文化の存在を示す。その具体的なあり方は、今後の検討課題であるが、少なくともこれまでの単純な技術・文化伝播論を克服する視点と方法が必要であることは間違いない。残された課題もあるが、その解明の端緒を獲得したことは大きな成果である。

(5)九州でも鹿児島県・大分県・福岡県は、それぞれに異なった石造物の分布が確認される。中でも鹿児島県は最も個性的で、畿内型石造物の影響から最も遠い存在である。これに対し、福岡県は博多・太宰府・宗像社などを中心に、畿内型石造物がかなり搬入され、時代を超えて畿内の石造文化を需要し続けていたことが明らかとなった。両者の中間に位置するのが大分県であり、この地域では国東塔のように、畿内型石造物の影響を受けつつ、地域色豊かな石造物を生み出している。この事実は、畿内系石造技術・文化を一方的に受容したのではなく、地域の伝統や嗜好に合わせて、必要な要素を取捨選択し、独自の造形を生み出したことを示す。

それは広島県尾道市と対岸の愛媛県今治市を中心とした芸予地域でも同様である。これらの地域は、花崗岩製石造物の宝庫であり、地元産花崗岩を使用し、畿内を除く西日本で最も高度に石造物を発展させた地域であった。その理由は、これらの地域が良質の花崗岩産出地であったこと、尾道周辺に鎌倉期から高野山や真言律宗が進出し、今治でも早くから東大寺と関係が深いなど、畿内型石造技術・文化が伝播・定着しやすい環境が形成されていたからである。瀬戸内海を挟んだ両地域は、内海海運の主要港湾都市として相互に影響しつつ、石造技術・文化の面でも交流を深め、畿内型花崗岩石造物の生産・流通の一大拠点に発展を遂げたのである。

(6)しかし、子細に見ると、今治周辺の宝篋印塔が越智式などと呼ばれるように、両者とも明確な地域色を有しており、無前提に畿内の石造技術・文化を受容したのではない。地域の伝統や嗜好に合わせ、必要な要素を取捨選択していたことが確認される。その点では大分県の国東塔などと共通性を持つ。

このように、13世紀後半に畿内系石造物の技術・文化が定式化し、四国・瀬戸内・北近畿・山陰に伝播し、拡散していく過程を概観すると、伝播は双方向的・連続的ではなく、畿内から各地へ伝播すると、それぞれの地域で地域色を持ったものに変化していくことが判明した。そして、定着過程で各地の伝統技術や文化との関係で、多様な石造物が成立してくることも明らかになった。

(7)問題は、伊派系を中心とした畿内型石造物に先行する在地系石造物の起源をどう捉えるかである。(4)では伊派系石工や技術と別の時期・ルートによって伝播した石造技術・文化の存在を指摘したが、本研究ではその考察を進める材料として、東大寺南大門の宋風石獅子や九州各地で確認される薩摩塔・石獅子・礎石などに着目し、その分布調査と検討を進めて検討を試みた。その結果、

宋風石造物とされるものの石材はほとんどが浙江石材(梅園石・小溪石)であり、その分布地域は九州西海岸を中心に中国地域西端部に及び、礎石の分布からは、文献史料には見えない新たな日中交流の場が数多く判明し、東大寺南大門の石獅子をはじめとする石獅子は、やがて寺社門前の狛犬へと変化していくことなど、その後の石造物にも影響を与えていることが分かった。しかし、薩摩塔については、中国の石造物の中での位置づけや、日本中世石造物への技術的影響について不明な点が多く、今後課題を残した。

(8)韓国の石造物調査は、石塔寺三層石塔との比較検討、日本中世の層塔への影響を中心課題として、8~10世紀の石塔に重点を置いて集中的に進め、韓国で確認される多重石塔の7~8割を実見し、検討を行った。また、日韓の研究会・検討会も実施した。その結果、この時期の日韓の石塔は、加工・造立技術の面で異なるが、屋根の加工に若干の共通性が見られることや、高麗時代に多様化する韓国石塔の中に、日本中世の石塔に類似したものが登場すること、韓国石塔に見られる垂木などの装飾が日本の石塔に影響を与えた可能性があることなど、新たな事実が明らかになってきた。また、韓国石造物の調査を契機に、これまで見過ごされていた非和風石塔類に目を向ける機運を生み出した結果、日本海沿岸地域を中心に、韓国風と見られる石造物の存在が相次いで指摘されるようになった。

日韓石造物の比較研究は、先行研究の成果が乏しいため、当初は手探り状態で調査・検

討を進めたが、研究期間終末近くなって、高麗～李朝時代の石造物調査が鍵を握ることが明らかとなった。その調査が進めば、これまで未解明であった日韓の石造技術・文化交流の内実をかなり解明できるであろうことが分かった。また、韓国での調査や共同研究会、日本での共同研究会・検討会を通じて、日韓の研究者間の交流・連携の基礎を築いたのも、大きな成果であろう。

(9) 石材識別・産地同定は、これまでのように経験と主観に頼る方法が限界になっていたが、私たちは石材の目視による表面観察、ルーペによる鉱物構成の観察、帯磁率の数値による比較検討、加工技術による形態的特徴の相違、宗教的・歴史的背景の考察などを総合し、より高い確度でその判断を行った。本研究の最終段階では、帯磁率と放射線量の計測数値を重ね合わせ、より確度を高める方法も試行されはじめたが、今や石造物研究にとって、石材・石質の検討とその方法論の刷新は不可欠の要件になってきた。

とりわけ本研究では、岩石・鉱物・火砕流の研究者を分担者・連携研究者・研究協力者として1名ずつ配し、帯磁率・放射線に詳しい研究者協力者も加え、文理協働による調査を進めた。中でも中国での石材調査は、これまで大ざっぱに梅園石とされていたものが、梅園石と小溪石に分かれることや、その形成過程を含めた岩石学的性格を明らかにし、この面での研究を大きく前進させることができた。さらに中国の石切場で採取したサンプルと九州に分布する薩摩塔薄片を化学分析により、同じ石材であることを確認するなど、人文系に自然系の研究手法を導入し、共同研究のあり方を提示することもできた。

ただし、石材の薄片とはいえ、文化財である石造物の一部破壊を伴う方法で石材識別・産地同定を試みた点は批判意見もあり、その点を重く受け止めて、非破壊のより良い分析法の開発に不断の努力をしていきたい。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 17 件)

大木 公彦・古澤 明・高津 孝・橋口 亘・市村 高男、薩摩塔石材と中国寧波市の下部白亜紀系方岩組地層との対比、鹿児島大学理学部紀要(地学・生物学)、査読無、Vol.43、2014、pp.9-24

市村 高男、中世日本の西の境界と黒潮トライアングル研究 - 鹿児島県三島村硫黄島の調査を踏まえて - 、Kuroshio Science、査読有、6-2、2013、pp.174-187

市村 高男・橋口 亘・雨宮 瑞生・江藤和幸・黒川 信義・海邊 博史・原田 昭一・西山 昌孝・松田 朝由・若松 重弘、鹿児島県三島村の石造物等調査概報 - 中世鬼界島(貴海島・貴賀島)の内側を探る - 、石造物の研究、査読無、Vol.31、

2013、pp.39-56

高津 孝・橋口 亘・大木 公彦、日本現存礎石石材調査報告、鹿大史学、査読無、Vol.60、2013、pp.11-22

千々和 到、バジル・ホール・チェンバレンのお札コレクション - 神社のお札と神代文字を中心に - 、日本村落自治史料調査研究所紀要、査読無、Vol.17、2013、pp.1-18

高津 孝・橋口 亘・大木 公彦、薩摩塔研究(続) - その現状と問題点 - 、鹿大史学、査読無、Vol.59、2012、pp.29-42

千々和 到、塩津・起請文木簡の古文書学的考察、査読有、113-6、2012、pp.1-11

佐藤 亜聖、石塔と石材、狭川真一他編「中世石塔の考古学」高志書院、査読無、2012、pp.281-290

高津 孝、薩摩塔礎石 - 浙江石材と東アジア海域交流、山田奨治他編「江南文化と日本 - 資料・人的交流の再発掘 - 」国際日本文化センター、査読無、2012、pp.213-225

市村 高男、戦国末期における下野那須衆の巖島社参詣 - 巖島神社蔵絵馬の墨書をめぐって - 、栃木県文書館研究紀要、査読無、Vol.15、2011、pp.1-11

大木 公彦・古澤 明・橋本 達也、大隅半島の神領10号墳石棺の岩石学的考察、鹿児島大学理学部紀要、査読無、Vol.44、2011、pp.9-13

佐藤 亜聖、鞆の浦弁天島石造層塔考、芸備地方史研究、査読無、Vol.275・276、2011、pp.41-53

佐藤 亜聖、大和における宝篋印塔の展開、藤澤典彦編「石造物の研究」高志書院、査読無、2011、pp.47-60

橋口 亘・高津 孝・大木 公彦、大応国師供養塔(福岡市興徳寺)四天王像彫出部材の発見と薩摩塔、南日本文化財研究、査読無、Vol.12、2011、pp.6-13

福島 金治、中世後期美濃国細目郷の領主と不二庵、愛知学院大学人間文化研究所紀要、査読無、Vol.26、2011、pp.1-24

福島 金治、密教聖教の伝授・集積と隔地間交流 - 「坊津一乗院聖教類」の検討を通じて - 、九州史学、査読有、Vol.160、2011、pp.48-58

桃崎 祐輔 他、九州発見中国製石塔の基礎的研究 - 所謂「薩摩塔」と「梅園石」製石塔、福岡大学考古学資料集成4、査読無、2011、pp.65-118

〔学会発表〕(計 4 件)

高津 孝、浙江石材と中世日本、石造物研究会、2014年3月15日、長崎県平戸市北部公民館

大木 公彦、寧波石切場の石材試料の分析、石造物研究会、2014年3月15日、長崎県平戸市北部公民館

桃崎祐輔、鶴殿石仏群の造営とその背景

- 相知の歴史・宗教と東アジアの関連に注目して -、唐津市文化課・唐津市相知町文化連合講演会(招待講演)、2012年11月18日、唐津史相知交流文化センターホール

高津 孝、薩摩塔と碇石 - 浙江石材と東アジア海域交流 -、国際日本文化センター海外シンポジウム「江南文化と日本 - 資料・人的交流の再発掘」、2011年5月27日、中国上海市・復旦大学

〔図書〕(計 7 件)

市村 高男 他、市村高男刊、西日本における中世石造物の成立と地域的展開 - 石材と形態・様式に着目して -、2014、146

市村 高男 他、彩流社、中世宇都宮氏の世界 - 下野・豊前・伊予の時空を翔る -、2013、359

市村 高男 他、高志書院、御影石と中世の流通 石材識別と石造物の形態・分布、2013、326、先山 徹・佐藤亜聖・福島金治・桃崎祐輔ら執筆

高津 孝 他、くらしがつなぐ寧波と日本、東京大学出版会、2013、252、大木公彦ら執筆

千々和 到・佐藤 亜聖 他、日本石造物辞典、吉川弘文館、2012、1365

山川 均・佐藤亜聖 他、寧波と宋風石造物、汲古書院、2012、

市村 高男 他、石造物が語る中世の佐田岬半島 運び込まれた隔地の石材、岩田書院、2011、122

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

市村 高男 (ICHIMURA, Takao)  
高知大学・教育研究部総合科学系・教授  
研究者番号：80294817

(2) 研究分担者

先山 徹 (SAKIYAMA Tōru)  
兵庫県立大学・付置研究所・准教授  
研究者番号：20244692

佐藤 亜聖 (SATOU Asei)  
(財)元興寺文化財研究所・主任研究員  
研究者番号：40321947

高津 孝 (TAKATSU Takashi)  
鹿児島大学・法文学部・教授  
研究者番号：70206770

福島 金治 (FUKUSHIMA Kaneharu)  
愛知学院大学・文学部・教授  
研究者番号：70319177

桃崎 祐輔 (MOMOSAKI Yuusuke)  
福岡大学・人文学部・教授  
研究者番号：60323218

(3) 連携研究者

大木 公彦 (OOKI Kimihiko)  
鹿児島大学・名誉教授  
研究者番号：90041235

千々和 到 (CHIJIWA Itaru)  
國學院大學・文学部・教授  
研究者番号：10013286

長谷川 博史 (HASEGAWA Hiroshi)  
島根大学・教育学部・教授  
研究者番号：20263642